限定解除、今は何も語れない

土橋淳志

登場人物

翔平(奈津美の兄、今日子の恋人)
奈津美(翔平の妹、劇作家)
今日子(翔平の恋人、自動車事故で亡くなる)
斎藤(奈津美の恋人、演出家)
渡辺(奈津美の先輩、俳優)
鹿子(鹿族のリーダー、鹿神様)
鹿五郎(野生のニホンジカ)
兄①(オオツカ家の兄、元外科医)
兄②(オオツカ家の兄、元外科医)
兄③(オオツカ家の兄、元外科医)
妹①(オオツカ家の妹、無職の兄の世話をしている)
妹②(オオツカ家の妹、無職の兄の世話をしている)
医者①
医者②
村人①
村人②
功さん

※以下の登場人物は同一の俳優が演じることを想定している。

今日子／鹿子／妹①
鹿五郎／兄①
渡辺／兄②／村人②
斎藤／村人①／医者②
功さん／医者①／兄③／妹②

1＃1

プロローグ

虫の声。夜。とある山奥の畑。真っ白な鹿(鹿子)が一頭。
鹿避けネットに角が絡まって暴れている。

鹿子　ぬうー、おのれー、何だこれは、誰かー、誰かおらぬかー。

藪の中から、もう一頭鹿(鹿五郎)が現れる。

鹿五郎　あら、あらら。
鹿子　おお、いいところに来た。

鹿五郎　大丈夫ですか？
鹿子　見てわからんのか。大丈夫なわけがなかろう。
鹿五郎　そうですよねえ。
鹿子　角が絡まって、動けんのだ。
鹿五郎　がっちり絡んでますねえ。
鹿子　早く何とかしろ。
鹿五郎　何とかしろって言われましても。
鹿子　一体何なのだこれは。
鹿五郎　これはシカ避けネットって言いましてね、私たちが畑や田んぼに入らないように、人間が作ったものですよ。
鹿子　ぬう、猪口才な、人間どもめえ。
鹿五郎　今時、小鹿でも知ってますよ、これに突っ込んだら角が絡まるって。
鹿子　貴様あ、無礼者。
鹿五郎　は？　何なんですか、さっきから偉そうに。
鹿子　我をどなたと心得る？　我は鹿の神、アメノカクノカミの末裔、鹿島の荒ぶる神、アメノカシマシカコなるぞ。
鹿五郎　…え？　ええっ？　鹿神様？
鹿子　そうだ。角が高い、ひかえおろう。
鹿五郎　は、ははあ。

鹿五郎、ひれ伏す。

鹿子　どうだ、恐れ入ったか。本来なら我は貴様のような下賤の鹿など、口もきけぬ、やんごとなき鹿なるぞ。
鹿五郎　ははあ、そんな鹿神様がなぜこのようなところに。
鹿子　うむ、春日の三笠山に向うているところ道に迷うてな。
鹿五郎　鹿島の鹿神様が、三笠山に？　ということは？
鹿子　そうよ、ついに時が来たのだ。われわれ鹿族の立ち上がる時が。人間どもから我らの土地を奪い返す戦の時が。
鹿五郎　おお、言い伝えにある通りだ。その者、白き毛皮をまといて三笠の山に降り立つべし。失われし大地をとりもどし、ついに鹿族を青き清浄の地へ導かん。
鹿子　だがそのためには、一刻も早く春日の三笠山におわすアメノカクノカミにお会いせねばならぬのだ。今のままでは我もただの鹿、神としての力を取り戻さねば。
鹿五郎　わかりました。しかし私一頭ではとても無理です。仲間を呼んできます、それまでしばしご辛抱を。
鹿子　おぬし、名を何と申す。
鹿五郎　鹿五郎と申します。
鹿子　そうか。鹿五郎よ、頼んだぞ、鹿族の命運はおぬしにかかっておる。
鹿五郎　はっ。

鹿五郎、藪の中に消える。

1＃2

鹿子　はっ、ほっ。

鹿子、暴れるが抜け出せない。

鹿子　やはり無理か。

そこへ村人が二人(村人①②)やって来る。

村人①　兄さん、ほらほら、あれです。
村人②　ほんまやな。
鹿子　ピーヤ。
村人②　がっちり絡んでるな。
村人①　はい。
村人②　あほな鹿やな。
鹿子　ピーヤ。
村人①　助けましょうよ。
村人②　何で？
村人①　かわいそうじゃないですか。
村人②　やめといたほうがええ。危ない。
村人①　大丈夫ですよ。

村人①、鹿子に近づく。

鹿子　ピーヤ。

鹿子、村人①を蹴ろうとする。

村人①　うわっ。
村人②　ほら、素人が手を出したら怪我するぞ。
村人①　じゃあ、どうしたらいいんですか。
村人②　俺、功さん呼んでくるわ。
村人①　何でですか？
村人②　前にもあったんや、鹿避けネットに鹿が絡まってたことが。うちの畑で。
村人①　へー。

村人②、鹿に近づく。

鹿子　ピーヤ。
村人②　なあ。鹿肉、食ったことある？
村人①　ないです。
村人②　けっこう美味しかったぞ。

村人①　ええっ？
村人②　その時も、功さんにばらしてもらったんやけど。
村人①　ばらすって？
村人②　解体するってこと、肉の臭みをとるには血抜きが重要らしいから、ここは慣れてる人に任せよう。
村人①　でも、かわいそうじゃないですか？
村人②　あほか、こっちは畑荒らされてえらい迷惑してるんや。一頭くらい食べても罰はあたらんやろ。
村人①　兄さんは二頭目でしょ。
村人②　細かいことは気にせんでええねん。な。
村人①　うーん。
村人②　じゃあ俺、功さん呼んでくるから。ちょっと見張っといてくれ。な。

村人②、立ち去る。

村人①　見張っといてくれ言われてもなあ。
鹿子　ピーヤ。
村人①　そうかそうか、動かれへんのか。
鹿子　ピーヤ。
村人①　かわいそうになあ。
鹿子　ピーヤ。
村人①　しゃーないなあ。

村人①、鎌を取り出す。

村人①　兄さんには悪いけど、助けたるわ。

村人①、鎌で鹿避けネットを切ってやる。

村人①　助けたるからな、じっとしとけよ。蹴るなよ。
鹿子　ピーヤ。

村人①、ネットを全部切り終わる。

村人①　ほら、これで自由やぞ。
鹿子　…フハハハハ、礼を言うぞ人間よ。来るべき戦の折、貴様の命だけは助けてやろうぞ。
村人①　よし、どこも怪我してないみたいやな。ほら、もう早く山に帰れ。
鹿子　さらばだ。大義であった。
村人①　もう畑に降りてくるなよー。
鹿子　ピーヤ。

鹿子、猛然と駆け出す。畑から道路へ出る。

村人①、演出家(斎藤)として挨拶。

斎藤　本日は『限定解除、今は何も語れない』にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。最後まで、ごゆっくりお楽しみください。

2＃1

葬儀の後

夜。大塚家の居間。
喪服の男(翔平)が足の裏を掻いている。頭には包帯を巻いている。
そこへ、喪服の女(奈津美)がやって来る。

奈津美　なあ。
翔平　…。
奈津美　なあ。
翔平　…。
奈津美　なあって。
翔平　…。
奈津美　兄ちゃん。
翔平　なに。
奈津美　何してるん？
翔平　足の皮。
奈津美　え？
翔平　足の皮めくってる。
奈津美　やめーや、そんなん。
翔平　何で？
奈津美　汚いやん。
翔平　汚いかなあ。
奈津美　汚いよ。
翔平　靴下履いてたよ。
奈津美　靴下履いてても。
翔平　そういえばネトネトしてる。
奈津美　ほら。
翔平　この靴下、安物やな。
奈津美　何それ。買ってきた私に対する当てつけ？
翔平　今日は暑かったからなあ。そら足の裏もネトネトするわな。
奈津美　…うん。
翔平　何て言うかさ、あんまり悲しくないねんな。何でやろ。
奈津美　…めっちゃ泣いてたやん。
翔平　あれは、葬儀屋の演出がさ、まあいいけど。

翔平、足の皮をめくる。

奈津美　だからやめって。

翔平、剥がれた足の皮を見つめて。

翔平　これどうしよう？

奈津美　しらんよ。

翔平　…食べれるかな。

奈津美　そんなん食べんときや。

翔平、足の皮を食べようとする。

奈津美　ちょっと。

翔平　冗談や。

翔平、足の皮を捨てる。

奈津美　あっ。

翔平、寝転がる。

奈津美　ちゃんと拾いなさい。

翔平　あーあ、だから田舎暮らしとか、俺は嫌やったのに。

奈津美　…。

翔平　これからどうしよ。免許でも取りにいくかな。何で俺免許持ってなかったんやろ。

奈津美　今更そんなこと考えてもしゃーないよ。

翔平　…そやな。

奈津美　何でもいいけど、喪服かけときや。

奈津美、ハンガーを差し出す。

奈津美　ほこりつくから。

翔平　ん。

2＃2

そこへ、喪服姿の男(斎藤)がやって来る。

斎藤　なっちゃん、そろそろ、帰るな。

奈津美　ああ、うん。

翔平　斎藤君、今日はありがとうな。

斎藤　いえ。(奈津美に)脚本の締め切り、無理せんでいいから。
奈津美　うん。
翔平　何や。また演劇の脚本書くんか。
奈津美　そやねん。
翔平　今回も斎藤君が演出？
斎藤　はい。落ち着いてからでいいから。
奈津美　うん。
斎藤　それじゃ。
奈津美　そこまで送るわ。(翔平に)兄ちゃん、さっきほかした足の皮、ちゃんと拾っときや。

斎藤と奈津美、立ち去る。

翔平　へいへい。

翔平、喪服を脱ぎ始める。

翔平　人から聞かれるたびに、何度も何度も話をした。同じ内容の話をしているつもりでも、記憶はどんどん曖昧に、細部は少しづつ、別の何かにすり替わっていく。それでも俺は、できるだけ正確に、あの時のことを思い出したいと思う。そう、これは訓練なのかもしれん。思い出す訓練。あの日俺は、今日子と、山奥にある物件を見学しに行った。その帰り道やった。

鹿子がやって来る。

鹿子　フハハハハ、礼を言うぞ人間よ。来るべき戦の折、貴様の命だけは助けてやろうぞ。さらばだ。大義であった。
翔平　車のヘッドライトに驚いて、一頭の鹿が、突然、飛び出してきた。

鹿子、道路へ飛び出す。急ブレーキの音。

鹿子　ピーヤ。

鹿子、車に撥ねられ倒れる。

翔平　白い短い毛がフロントガラスに飛び散り、今日子は、慌ててハンドルを切った。車は谷底に落ちて、途中の木にぶつかって、止まった。

鹿五郎がやって来る。心配そうに、鹿子の周りをウロウロする。
瀕死の鹿子は立ち上がることができない。

鹿五郎　ピーヤ。
鹿子　…ピーヤ。

鹿五郎　ピーヤ。
鹿子　…ピーヤ。
鹿五郎　ピーヤ。

鹿子、息を引き取る。

村人②　功さん、あれです。

村人②と功さんがやって来る。鹿五郎は山へ逃げる。

翔平　俺らは救急車で近くの病院に運ばれた。
功さん　残念やけどこれは食えん。
村人②　何でですか？
功さん　だんどりを間違えてしもたからな。
村人②　だんどり？
功さん　ご飯食べるときに頂きますいうやろ。あれと同じや。山の生き物殺して食う時にもだんどりが必要なんや。それが山の神様との約束やからな。それにしても、おかしな鹿や。
村人②　どうかしたんですか？
功さん　メスやのに角がある。
村人②　え？
功さん　いや、まさかな。

村人たち、鹿子を山に埋める。

翔平　後から聞いた話によると、鹿は山に埋められたそうだ。

翔平、喪服をハンガーにかけ終わる。立ち去る。

3＃1

奈津美と今日子

大塚家の居間。今日子(鹿子)がタオルケットをかぶって寝ている。
そこへ奈津美、やって来る。

奈津美　今日子さん。
今日子　…。
奈津美　今日子さん。
今日子　ピーヤ。
奈津美　ピーヤ？
今日子　…あれ？

奈津美　おきてください。
今日子　ここは？
奈津美　私らの家です。
今日子　ああ、そうか。あのまま寝てもたんや。
奈津美　はい。
今日子　翔平さんは？
奈津美　兄ちゃんなら仕事行きましたよ。休日出勤やいうて。
今日子　そっか。うう、頭痛い。
奈津美　二日酔いですか？
今日子　たぶん。なんか変な夢見たわ。
奈津美　変な夢？
今日子　私、鹿の鹿子っていう鹿でな。
奈津美　鹿？
今日子　その世界では、鹿と人間が戦争してて、私は鹿族のリーダーやねん。そんな夢。
奈津美　はあ。
今日子　これ、奈津美ちゃんの脚本に使われへんかな。
奈津美　え？
今日子　ほら、昨日飲んでるときに、もうすぐ締め切りやのに何書いたらいいかわからへんって言うてたやん。
奈津美　ああ。
今日子　どう？
奈津美　うーん、何で鹿なんですか？
今日子　何でやろうな。
奈津美　無意識で何かあるのかも。
今日子　たぶん、あれかなあ。今度引っ越すところな、めっちゃ鹿多いらしいねん。農作物を食べに山から降りてくるねんて。
奈津美　どんだけ田舎なんですか。
今日子　いいとこやでー。山と田んぼしかない。こないださ、翔平さんと下見に行ったんやけど、蛍がいっぱい飛んでてさ。きれいやったよー。
奈津美　よかったですね。夢がかなって。
今日子　夢っていうほど大層なもんちゃうけどな。
奈津美　でも、念願やったんでしょ。
今日子　まあね。引っ越したらいろいろやるよ。
奈津美　いろいろ？
今日子　畑借りて野菜作ったりとか。
奈津美　ああ、それでその野菜を鹿に食われると。
今日子　え？
奈津美　さっきの夢ってそういう意味なんじゃないですか？
今日子　あ、そうかも。
奈津美　さてと。朝ご飯、食べて帰りますよね。
今日子　ああ、うん。

奈津美、タオルケットを片付ける。

今日子　でもまだいいかも。
奈津美　そうですか？
今日子　うん。
奈津美　それにしても、兄ちゃんがよくウンて言いましたね。
今日子　何で？
奈津美　田舎暮らしとか向いてなさそうやし。
今日子　そうかなあ。
奈津美　虫とか嫌いじゃないですか。
今日子　わりと乗り気やったよ。
奈津美　人間変われば変わるもんですねえ。
今日子　…なあなあ。
奈津美　何ですか？
今日子　お兄さんがいるのってどんな感じ？
奈津美　え？　何ですか急に。
今日子　いや、私一人っ子やからさ。
奈津美　どんなって言われてもね。
今日子　私、生まれ変わったら、翔平さんの妹がいいな。
奈津美　は？　何でですか？
今日子　だって子供の頃からずっと一緒にいられるやん。
奈津美　ろくなもんじゃないですよ。兄妹なんて。
今日子　何で？
奈津美　喧嘩ばっかりするし。
今日子　それも楽しいやん。来世ではそれがいいな。
奈津美　来世ではって、これからずっと一緒にいられるじゃないですか。
今日子　そうなんやけど。…私、もうすぐ死ぬからさ。
奈津美　…え？
今日子　私もうすぐ死ぬから。知ってるねん。私はあの人とずっと一緒にいられへん。だから。せめて来世ではずっと一緒にいたいなって。
奈津美　何言ってるんですか。
今日子　鹿神様が教えてくれたから。
奈津美　鹿神様？
今日子　鹿子のこと。私と鹿子は一緒に死ぬねん。死んでひとつになって、世界に裂け目ができる。時間と空間が不連続になるっていうんかな。
奈津美　ちょっと待ってください。もしかして夢の話ですか？
今日子　…そう、夢の話。
奈津美　何や、びっくりした。急に何言い出すんかって思いましたよ。
今日子　フフフ、じゃあこれも書いてみようよ。
奈津美　これも？
今日子　人間と鹿の戦争と、兄と妹の物語。

4＃1

増える兄貴①

オオツカ家の食卓。
オオツカ家の兄(兄①②)と妹が朝ご飯を食べている。
兄①②と表記されている場合は台詞を当時に発語する。

兄①②　ごちそうさまでした。
妹①　はい。

兄①②立ち上がる。

妹①　兄ちゃん。
兄①②　え？
妹①　ちょっと、どこ行くん？
兄①②　いや、部屋。
妹①　ご飯食べ終わったら話あるって言うたやろ。
兄①②　ああ。何なん話って。
妹①　ちょっと、とりあえず座り。
兄①②　え？
妹①　座りなさい。
兄①②　はーい。

兄①②座る。

妹①　あのさ、今日こそ言わせてもらうわ。
兄①②　なに？
妹①　いつまでこんな生活続けるの？
兄①②　え？　何が。
妹①　何がじゃないよ。今、部屋に戻って何する気やったん？
兄①②　いやー、ゲーム。
妹②　ゲーム？
兄①②　うん。
妹①　あのさ、兄ちゃん、今日何曜日か知ってる？
兄①　えーっと、何曜日かなあ。
兄②　最近、曜日感覚ないからなあ。
妹①　月曜日。
兄①②　ああ、月曜日か。
妹①　平日やんな。
兄①　おう。
兄②　平日やな。
妹①　何て言うか、焦りとかそういうのないの？

兄①②　焦り？
妹①　そろそろ、いい加減、ちゃんとしよ。
兄①②　…。
妹①　今日子さんのことがあって、辛いのはわかるけどさ。もうそろそろちゃんとせんと。
兄①②　いや、しようと思ってるよ。
妹①　思ってるだけじゃあかんの。行動に移さんと。
兄①②　おう。
妹①　私かってもう、限界なんやから。
兄①　限界って。
兄②　何やねん限界って。
妹①　面倒見きれへん。私かってしんどいの。
兄①②　…。
妹①　あーあ、何か、ごめん。ごめんな。何か朝から。
兄①　いや、謝らんでもいいよ。
兄②　謝るなよ。
妹①　疲れてるんかな。うん、疲れてるんやわ。何か兄ちゃん、二重に見えるし。
兄①②　え？
妹①　声も二重に聞こえるし。
兄①②　…。
妹①　気のせいやんな。疲れてるんやわたぶん。
兄①　気のせちゃうな。
兄②　気のせいちゃうぞ。
妹①　え？
兄①　俺もさっきからずっと気になっててん。
兄②　俺も気になってたよ。
兄①　何かこの辺に俺そっくりなんがおるなって。
兄②　誰かブツブツ言うとるなって。
兄①　誰やお前。
兄②　お前こそ誰やねん。
兄①　(妹①に)おい、これ誰や。
兄②　(妹①に)誰これ？
妹①　え？
兄①②　…。
妹①　えーっと、兄ちゃん。
兄①②　どっちが？
妹①　…どっちも。
兄①②　どっちも？
妹①　こらあかん。

妹①、立ち上がる。

妹①　兄ちゃんが増えた。

兄①②　増えた？
妹①　…とりあえず。これ片づけて。
兄①②　え？
妹①　行くよ。
兄①②　どこに？
妹①　病院。

妹①と兄①②、病院に出かける。

モノローグ①

妹①　かつて人類と鹿の間に大きな戦争があった。
妹①と奈津美　長きにわたって人畜無害な草食動物を装っていた鹿たちは、ある日突然、人類に襲い掛かった。完全な奇襲となった当初は、鹿たちが優勢であった。しかし、体勢を立て直した人類は反撃を開始。最新鋭の兵器と圧倒的な物量の前に鹿たちはなすすべもなく敗走し、
奈津美　最後の砦となった奈良県三笠山の陥落をもって、戦争は終結した。のちにいう第一次鹿の乱である。

4#2

妹①と兄①②、病院にやって来る。

医者①　次の方どうぞ。

妹①と兄①②、診察室に入って来る。

妹①　失礼します。
兄①②　失礼します。
医者①　あれ？　どこかでお会いしませんでした？
妹①　いえ、初めてですけど。
医者①　そうですか。えーっと、それで、どうされました？
妹①　あの、本当にここでいいのか確信は持てないんですけど。
医者①　というと？
妹①　というのは、これが本当に心の病かどうかという点で。
医者①　ふむふむ。
妹①　かと言って他に来るところも思いつかなくて。
医者①　いいですよ。とにかく話してみてください。話すことが大切なんです。
妹①　わかりました。その、ちょっとにわかには信じられないと思うんですけど。
医者①　はいはい。
妹①　兄が、二人になったんです。
医者①　…ん？　ん？　どういうことですかな？
妹①　だから、兄が二人になったんですよ。

医者①　えーっと、こちらがお兄さん。
兄①②　はい。兄です。
妹①　昨日までは一人だったんですけど。急に、何と言いますか、増えたんです。
医者①　なるほどなるほど。
妹①　どういうことなんですかね。もう、とても困ってるんです。
兄①②　困らせてすまん。
妹①　なんかもうどうしていいのか。
医者①　わかりました。わかりましたから、落ち着いてください。
妹①　はい。
医者①　大丈夫ですから。うん、大丈夫。はいはい、なるほどね。

医者、サラサラとカルテを書く。

医者①　いいですか、よく聞いてください。
妹①　はい。
医者①　まあ、端的に言いますと、気のせいです。
妹①　え？
医者①　気のせいなんです。全部。
妹①　いやいや、気のせいじゃないと思いますよ。現にほら、ここに二人いるわけですから。
医者①　もともと二人だったんですよ。
妹①　いえ、一人でした。これはもう間違いなく。
医者①　じゃあ、一人なんじゃないですか。
妹①　じゃあって何ですか。
医者①　こう、二人に見えているだけで。目の錯覚的な何かで。
妹①　先生、もっとちゃんと診てくださいよ。ほら。
医者①　ちゃんとって何ですか。診てますよ私は。
妹①　診てないでしょ。
医者①　診てます。
妹①　どう考えても増えてるんですよ。
医者①　あのね、人が増えるなんてそんなことあるわけないでしょ。あなたたち患者のふりをして私をからかってるんでしょ？　ねえそうなんでしょ？　昨日もね、来たんですよ。父親が五人に増えたっていう人が、母親は十人だったかな、みんなグルになって私をからかってるんですよ。うん、そうに決まってる。
妹①　…。
医者①　お薬出しておきますので。一日三回食後に飲んでください。まあ、気休め程度ですけど。次の方どうぞ。

4＃3

そこへ、もう一人医者(医者②)が入って来る。

医者②　あれ？

医者①　あ。
医者②　こらこら、またお前は、勝手に診察室に入るなって言うてるやろ。
医者①　すみません。

医者①、立ち上がる。

医者①　失礼しました。

そのまま立ち去る。

医者②　全く、しょうがない奴やな。
妹①　あのう。
医者②　ああ、ごめんね。彼ね、うちの患者。時々ね、こういう悪戯するのよ。困った奴やで、ほんまに。
妹①　…。
医者②　彼も昔はね、いい医者やったんやけどね。まあ、よくあることですよ。あれ？どこかでお会いしませんでした？
妹①　いえ。
医者②　気のせいか。で、今日はどうされたのかなと。

医者②、カルテに目を通す。

妹①　あの。
医者②　ご心配なく。彼、元医者だけあってカルテは真面目に書く方やから。
妹①　はあ。
医者②　なるほど。お兄さんが急に増えたと。こちらがお兄さん。
兄①②　はい。急に増えてしまいまして。
医者②　なるほどなるほど。
妹①　どうなんでしょう。これは何かの病気なんですかね。
医者②　あのですね、いいですか。病気という言葉を軽々しく使ってはいけませんよ。我々は多かれ少なかれみんな病気なんですから。
妹①　でもですね、こんな人が急に増えるなんて。
兄①②　そうなんですよ。自分としても非常に心苦しいんです。どうにかしてください。
医者②　まあまあまあ、わかりました。わかりましたから、落ち着いてください。
兄①②　はい。
医者②　えーっとですね、いいですか。よく聞いてください。
妹①　はい。
医者②　こういうことはですね、よくあることなんですよ。
妹①　え？　よくあることなんですか？
医者②　そうです。端的にいいますとですね。よくあることです。
妹①　はあ。
医者②　昨日もね、父親が五人に増えたって人が来ましてね。母親は十人だったかな。とにかくこれはよくあることなんです。だからとにかく、安心してもらって結

構です。
妹①　結構ですって言われても。困りますよ。
医者②　じゃあ逆に聞きますけど、何か支障はありますか？
妹①　え？
医者②　お兄さんが二人になって何か困ることでも？
妹①　えーっと。
医者②　ないでしょう。別に。これはある種の防衛本能なんです。
妹①　防衛本能？
医者②　お兄さんなりのね。だからここはもう覚悟を決めてください。ね。お薬出しておきますので。一日三回食後に飲んでください。まあ、気休め程度ですけど。次の方どうぞ。

モノローグ②

妹①　人類と鹿の戦争が始まってすぐ、兄は国際医療チームの一員として戦地に赴いた。
妹①と奈津美　そこで出会ったのが今日子さん。今日子さんは非政府機関の代表で、人類と鹿との和平交渉を働きかけていた。
奈津美　二人は一目で惹かれあい、もつれあい、愛し合った。
奈津美・斎藤　燃え上がるラブ、ラブ、
斎藤　ラブ？　だけど、今日子さんは、兄の目の前で、鹿に角で貫かれ、死んでしまった。その戦場で兄だけが生き残った。

5＃1

斎藤と鹿五郎

事故から約三か月後。深夜。渡辺の家。
斎藤、手にしていた脚本を置くと、缶ビールを飲む。卓袱台の上にはもう一本の缶ビールと数本の空き缶、大きな封筒。
中年の男(渡辺)がやって来る。

渡辺　おいおい、大丈夫か？　飲みすぎちゃうか？
斎藤　いやもう酒ぬけましたよ。
渡辺　飲んでるやないか。
斎藤　迎え酒ですよ。
渡辺　俺の家でゲロ吐くなよ。
斎藤　大丈夫です。大丈夫。
渡辺　じゃあ俺、バイト行ってくるから。ほんま、ゲロ吐くなよ。
斎藤　はい。

斎藤、新しい缶ビールを差し出す。

渡辺　何や？
斎藤　まあ飲みましょうよ。
渡辺　話聞いてた？
斎藤　まあまあまあ、
渡辺　これからバイトやねん。
斎藤　ええ歳してバイト、劇団員って大変ですね。
渡辺　うるさいわ。
斎藤　二次会。二人だけの。しましょうよ。
渡辺　…もう、一口だけやぞ。

渡辺、缶ビールを受け取り開ける。

渡辺　乾杯。公演、お疲れ様。
斎藤　お疲れ様です。

二人、ビールを飲む。

渡辺　終わったなあ。
斎藤　終わりましたね。
渡辺　じゃあバイト行ってくるわ。
斎藤　もう行くんですか？
渡辺　時間ないんや。
斎藤　もうちょっと話しましょうよ。
渡辺　話って？
斎藤　芝居のこととか。
渡辺　えー、そやなあ。じゃあ聞いていい？
斎藤　何ですか？
渡辺　あれ、何やったん？
斎藤　あれ？
渡辺　打ち上げで、奈津美ちゃん、めっちゃ不機嫌やったやん。
斎藤　ああ。
渡辺　脚本家があれはアカンと思うで。場は盛り下がるし、本人は途中で帰るし。
斎藤　はいはい。
渡辺　何か喧嘩でもしたん？
斎藤　喧嘩というか何というか。
渡辺　そんなにお前の演出が気に入らんかったんかな。確かにお前の演出は未熟やったけど。
斎藤　ちょいちょい、未熟って。
渡辺　つたなかったけど。
斎藤　つたないって、本人を前にして。
渡辺　まあでもそういうことやろ？　奈津美ちゃんが書いた脚本を俺らがうまくできんかったから。

斎藤　いやちがうんですよ、演出でも俳優でもなくて、脚本が気に入らなかったらしんですよ。
渡辺　脚本？
斎藤　はい。
渡辺　自分で書いておいて、それは無責任やな。
斎藤　それが、違うんですよ。
渡辺　何が違うん？
斎藤　今回の脚本は、あいつが書いたんじゃないらしいんですよ。
渡辺　どういうこと？
斎藤　僕にもよくわからないんですけど。僕らは奈津美の書いたのと、全く違う脚本を上演してしまったらしいんですよ。
渡辺　は？
斎藤　はい。
渡辺　ちょっと全然意味がわからんのやけど。
斎藤　だから、今回俺らが上演したお芝居を、あいつは書いてないんですよ。
渡辺　奈津美ちゃんが書いて送ってきたんやぞ。
斎藤　そうなんですけど。
渡辺　…奈津美ちゃん、大丈夫なんかな。やっぱりもう少し休んでもらった方がよかったんちゃうかな？　お兄さん、まだ引きこもってるんやろ？
斎藤　この封筒、これに入れて脚本送ってきたんですよね。奈津美が渡辺さんの家に。
渡辺　それがどうしたん。
斎藤　ここ、一回剥がして貼ったように見えません？
渡辺　(封筒を受け取って)どういうこと？
斎藤　だから、誰かがすり替えた可能性もあるんかなって。
渡辺　は？
斎藤　いや、考えすぎですよね。
渡辺　考えすぎやろ。誰がそんなことするん。
斎藤　そうですよね。
渡辺　お前も、大丈夫か？
斎藤　奈津美が、私は書いてないって、あんまり言うから。
渡辺　それは間違いなく、奈津美ちゃんが書いた脚本やって、読んだらわかるやろ。
斎藤　そうですよね。
渡辺　やば、もうこんな時間や。何かよくわからん話になってしもたけど。もう俺行かなあかんから。
斎藤　はい。
渡辺　それじゃ、くれぐれも、俺んちでゲロ吐くなよ。

渡辺、立ち去る。

5＃2

斎藤　…よくわからん話か。そういえばこれもよくわからん話やったな。

斎藤、脚本を読み始める。
そこへ鹿五郎が現れる。

鹿五郎　ピーヤ。
斎藤　…ピーヤ？
鹿五郎　ピーヤ。
斎藤　…え？　何？
鹿五郎　ピーヤ。
斎藤　鹿？
鹿五郎　ピーヤ。
斎藤　何で？
鹿五郎　ピー、…斎藤さんですね。
斎藤　しゃべった。
鹿五郎　斎藤さんですね。
斎藤　は、はい。そうですけど。
鹿五郎　よかった。探してたんですよ、あなたのこと。
斎藤　何やこれ。夢か？
鹿五郎　夢ではありません。
斎藤　だってでも、おかしいやん。
鹿五郎　そうですよね、突然こんな鹿がやってきたら、誰だって夢か幻かと思いますよね。でも、これは断じて夢ではありません。わたくし、鹿の鹿五郎と申します。
斎藤　何なん一体。
鹿五郎　まあまあ、落ち着いてください。
斎藤　落ち着けるか。
鹿五郎　あまり時間がないんですよ。わりと急を要する用件なので。
斎藤　用件？
鹿五郎　はい。ちょっとあなたにお願いしたいことがありまして。
斎藤　なに。
鹿五郎　探し物です。三か月ほど前、私たちの神様が行方不明になりまして。それを一緒に探してもらいたいんです。
斎藤　はあ？　神様？
鹿五郎　はい、鹿族の神様、鹿神様です。どこかに行ってしまいまして非常に困ってるんです。
斎藤　そんなん、自分で探してくれよ。
鹿五郎　そういうわけにはいかないんです。私たちには手が出せない裂け目に落ちてしまったみたいで。
斎藤　裂け目？
鹿五郎　空間的、時間的断裂です。これは人間特有のもので、私たち鹿には手が出せないのです。
斎藤　何を言ってるか全然わからへんのやけど。
鹿五郎　わからなくても大丈夫です。
斎藤　ていうか何で俺なん？　他の人に頼んでくれよ。

鹿五郎　あなたじゃないと駄目なんです。何故ならあなたのお付き合いされているメス、大塚奈津美さんと、そのお兄様に関わることですから。
斎藤　え？　奈津美と？
鹿五郎　はい。

鹿五郎のお腹が鳴る。

鹿五郎　奈津美さんのお兄様が遭われた事故のことはご存知ですよね？

鹿五郎、空腹に耐えかねて鹿煎餅を食べ始める。

鹿五郎　その事故の際に撥ねられたのが私たちの探している鹿神様です。肉体は回収したのですが中身が空っぽでして。要するに魂がどこかに行ってしまったんですね。おそらくは事故のときにできたお兄様の裂け目の中に落ちてしまったと思われます。
斎藤　…。
鹿五郎　もちろんただでとは言いませんよ。ここはひとつ、取引をしましょう。
斎藤　取引？
鹿五郎　はい。今たしか斎藤さんにもお探しのものがありますよね。置きびきにあった、奈津美さんのノートパソコンです。あの中には大切な物が入っていたんじゃないですか？　例えば、奈津美さんの書いた脚本の原本とか。
斎藤　俺らの事情にめっちゃ詳しいな。
鹿五郎　パソコンが戻ってくれれば、奈津美さんと仲直りできるかも知れませんよ。
斎藤　仲直りとかそういうんじゃないねん。
鹿五郎　じゃあ何ですか？
斎藤　…何ていうか、俺は知りたいだけやねん。
鹿五郎　どっちでもいいですよ。で、どうしますか？　取引しますか？
斎藤　するって言うたら、どうなるん？
鹿五郎　じゃあ、取引成立ですね。

渡辺が戻ってくる。

渡辺　斎藤、ちょっとええか。
斎藤　どうしたんですか？　バイト行ったんじゃないんですか？
渡辺　大変やぞ。これ。

渡辺、手にノートパソコンを持っている。

渡辺　自転車の前かごに入ってたんやけど。

斎藤、ノートパソコンを受け取る。

鹿五郎　ご心配なく、私は斎藤さん以外には見えません。

渡辺　それ、奈津美ちゃんのノートパソコンちゃうか？　盗まれたっていうてた。
斎藤　そうです。
鹿五郎　それでは行きましょうか。
斎藤　え？　どこに？
鹿五郎　決まってるじゃないですか。そのパソコンを返しに行くんですよ。ついでにお兄様にも会えます。
斎藤　今から？
鹿五郎　善は急げです。
渡辺　斎藤、誰と喋ってるん？
斎藤　おい、ちょっと待てよ。

鹿五郎と斎藤、鹿神の魂を回収に出かける。

渡辺　斎藤、どこ行くん？

渡辺、立ち去る。

6＃1

翔平と顕微鏡

蝉の声。事故から約三か月後。大塚家の居間。
翔平が顕微鏡を覗いている。
そこへ奈津美やって来る。

奈津美　何してんの？
翔平　…うん。
奈津美　なあ、何してるの？
翔平　…うん。
奈津美　何それ。
翔平　顕微鏡。
奈津美　で、どうしたんそれ。
翔平　うん。
奈津美　もしかして、買ったん？
翔平　アマゾンで。
奈津美　ちょっと兄ちゃんまさか。

奈津美、戸棚の封筒を確かめる。

奈津美　ここに入ってた二万円は？
翔平　だから着払いで。
奈津美　はあ？　勝手に使わんといてよ！

翔平　ごめんごめん。
奈津美　つーか、何で顕微鏡？
翔平　いや、ちょっとな。
奈津美　ちょっと？
翔平　見てみたいものがあって。
奈津美　なに？
翔平　見てみる？
奈津美　うん、そら見る権利あるわ。私のお金で買ったんやから。

奈津美、顕微鏡を覗きこむ。

翔平　見える？
奈津美　何これ。何か白い、ふわふわした。
翔平　そうそう。
奈津美　きれいやん、何これ。
翔平　白癬菌。
奈津美　はくせんきん？
翔平　まあ端的言うと、水虫やな。俺の足の裏の。
奈津美　はあ！？　ちょっと！　何見せてくれてんのよ。気持ち悪いな。
翔平　気持ち悪いとかいうなよ、可愛いもんやで。
奈津美　ていうか、兄ちゃん水虫なん？
翔平　うん、ジュクジュク系じゃなくてカサカサ系やけど。
奈津美　カサカサ系？
翔平　カサカサして皮がめくれるタイプの。

奈津美、飛びのいて。

奈津美　ちょっと！　うつさんといてな。靴下履いて靴下、菌バラまかんといて。
翔平　人をバイキンみたいに言うなよ。
奈津美　バイキンみたいなもんやん。足拭きマットも消毒せな。アウトブレイクや！　パンデミックや！
翔平　大げさやなあ。
奈津美　もう信じられへん。病院行ってきて。病院行ったら治してくれるから。な。今直ぐ。
翔平　嫌や。
奈津美　何で？
翔平　俺はこの水虫と一緒に生きていくねん。
奈津美　はあ？
翔平　(足の裏に)なあ。
奈津美　誰に話しかけてるの。
翔平　白癬菌。
奈津美　兄ちゃん、大丈夫？
翔平　あのさ、この水虫は、形見やねん。

奈津美　形見？
翔平　あいつの。あいつにうつされたから。
奈津美　…そ、そうなんや。
翔平　あいつの生きた証がここに生きづいとるねん。だから絶対治したらあかんねん。わかるやろ？
奈津美　…うん。

翔平、顕微鏡を覗く。

奈津美　…いやいやいや。
翔平　いやいやいや？
奈津美　それとこれとは話が別やから。私にうつす前に病院行きなさい。
翔平　嫌や。
奈津美　行きなさい。
翔平　ていうか奈津美、ちょっとこっちおいでや。
奈津美　なに。
翔平　足出してみてや。
奈津美　何で。
翔平　バックアップとして移植するから。(足を出して)な、ほら。
奈津美　あほか。つきあっとれんわ。ほんま明日病院行ってきてな。

奈津美、立ち去る。

6＃2

翔平　…そんな嫌がらんでもいいのに。(顕微鏡を覗いて)なあ。

部屋の入口に、斎藤と鹿五郎が立っている。

斎藤　…こんにちは。
翔平　あれ、斎藤君。
斎藤　…。
鹿五郎　大丈夫です。斎藤さん以外に私は見えませんから。
翔平　どうしたん？
斎藤　あの、奈津美さんは？
翔平　今、帰ってきたけど。
斎藤　あ、そうですか。
翔平　一緒じゃなかったん？
斎藤　はい。
翔平　何なん。どうしたん？
斎藤　いや、実はこれ、奈津美さんのノートパソコンなんですけど。ひょんなことから見つかったんで、持ってきたんですよ。
翔平　え？　あの、盗まれたとかいうてた？

斎藤　はい。
翔平　ひょんなことから？
斎藤　はい。
翔平　よかったやん。(奈津美を呼ぼうとする)奈津美。
斎藤　あ、ちょっと待ってください。
翔平　何、どうしたん？
斎藤　いや、実はこのパソコン見つけてくれたやつがですね。取引というか、お兄さんにお願いがあるらしいんです。
翔平　俺に？　お願い？
斎藤　(鹿五郎に)何て言うたらええねん。
鹿五郎　鹿神様の魂が。
斎藤　鹿神様の魂がですね、行方不明でして。
翔平　鹿神様？
鹿五郎　裂け目に。
斎藤　裂け目に落ちてしまったらしくて。
翔平　裂け目？
鹿五郎　空間的、時間的な。
斎藤　空間的、時間的な断裂ですね。
翔平　ちょっと、何を言うてるか全然わからへんのやけど。
斎藤　僕もです。
鹿五郎　(翔平の頭の臭いを嗅いで)ここが怪しいです。
斎藤　え？　ちょっとすみません。

斎藤、立ち上がって翔平に近づく。

翔平　なに、どうしたん？
斎藤　ちょっと失礼します。

斎藤、翔平の頭を調べる。

翔平　何なん？
斎藤　失礼してまーす。これ？
翔平　ああ、まだ傷目立つ？
斎藤　(鹿五郎に)これが裂け目？
鹿五郎　表の裂け目ですね。
斎藤　表の裂け目？
鹿五郎　でも本命は裏の裂け目です。こっちですかね。

鹿五郎、翔平の足の裏の臭いを嗅ぐ。

鹿五郎　間違いないですね。鹿神様の臭いがここからします。
斎藤　お兄さん、ちょっといいですか？
翔平　なに？

斎藤　ちょっといいですか？
翔平　何なん？
斎藤　足の裏、ちょっと見せてもらっていいですか？
翔平　え？
斎藤　ちょっとでいいんで。
翔平　…あかん。
斎藤　何でですか？
翔平　何かわからんけど。あかん。
斎藤　いいじゃないですか。ちょっと見せてくださいよ。
翔平　あかんて。
斎藤　見せてくださいよ。
翔平　あかんて。

斎藤と翔平、揉み合いになる。

斎藤　お兄さん。
翔平　あかんて、斎藤君。
斎藤　お兄さん。
翔平　あかんて、斎藤君。

斎藤、翔平の足に関節技を決める。

翔平　あー。
斎藤　どうや、鹿五郎、裂け目は？　裂け目はあるか？
鹿五郎　ありました。斎藤さん、ありましたよ裂け目。
斎藤　ほんまや、お兄さん、足の裏、カサカサやないですか。

騒ぎを聞きつけて、奈津美がやってくる。

奈津美　え？　あんたら。何やってるん？
翔平　斎藤君、それ、水虫、水虫。
斎藤　え？　水虫？

7＃1

増える兄貴②

オオツカ家の食卓。
兄①②③と妹①が朝ご飯を食べている。

兄①②③　ごちそうさまでした。
妹①　はい。

兄①②③、立ち上がる。

妹①　にいちゃん。
兄①②③　え？
妹①　ちょっと、どこ行くん？
兄①②③　いや、部屋。
妹①　ご飯食べ終わったら話あるって言うたやろ。
兄①②③　えー、またー？
妹①　ちょっととりあえず座りなさい。
兄①②③　はーい。

兄①②③、座る。

妹①　ん？　んん？　ちょっと待って。
兄①②③　どうしたん。
妹①　目の錯覚かな。何か、また増えてない？
兄①②③　え？

兄①②③、お互いを見る。

妹①　いち、にい、さん。いち、にい、さん。
兄①②③　ほんまや。三人になってる。
妹①　えー、もう、何でまた増えるの！
兄①②③　ごめーん。
妹①　どうすんの？
兄①②③　どうしよう？
妹①　何で？
兄①②③　え？
妹①　何で増えるの？　何が不満なの？
兄①②③　いや、不満とかそういうのじゃないよ。なあ。
兄①②③　おうおうおう。
妹①　…とりあえず、三人一緒に喋るのやめてくれへん。
兄①②③　何で？
妹①　何かもう頭がおかしくなりそう。
兄①②③　わかった。
妹①　…。
兄①　わかった。
兄②　わかった。
兄③　わかった。
妹①　ちょっと、落ち着いて考えてみよう。
兄①　おう。
兄②　おう。

兄③　おう。
妹①　何かきっかけがあるはずやねん。
兄①　きっかけ？
兄②　きっかけ？
兄③　きっかけねえ。
妹①　この前に増えたときはどやった？　何か今回との共通点は。
兄①②③　えーと。
妹①　朝ご飯食べてたよな。
兄①②③　食べてた。
妹①　献立は？
兄①②③　えーっと、
兄①　味噌汁に。
兄②　ご飯に。
兄③　カッサカサのコロッケ。
妹①　今日は？
兄①　目玉焼きに。
兄②　コーンスープに。
兄③　カッサカサのクロワッサン。
妹①　共通点は？
兄①②③　カッサカサー！
妹①　うーん、話が見えへんな。
兄①②③　みえへんなあ。
妹①　とりあえずこれ片づけて。
兄①②③　え？
妹①　行くよ。
兄①②③　どこに？
妹①　病院。
兄①②③　えー、またー？
妹①　いいから行くよ。
兄①②③　はーい。

モノローグ③

妹①　何故、鹿が人間を襲ったのかには様々な説がある。ウイルスや寄生虫を原因とするもっともらしいものから、
妹①と斎藤　自然を破壊した人類に対する神による警告というオカルト説。大手製薬会社の開発したアルツハイマーの特効薬の副作用で、知能が異常に発達した鹿が反乱を起こしたという陰謀論まで、枚挙に暇がない。
斎藤　ただひとつだけ確かなのは、その原因がわかったところで亡くなった人たちは帰ってこないということだ。

7＃2

妹と兄①②③、この前とは別の病院にやって来る。

兄①②③　失礼しまーす。

診察室に入るとそこには誰もいない。
医者が座っているはずの椅子には白衣がかけてある。

妹①　この方法だけは避けたかったんやけど。
兄①②③　なに？　どうしたん？

妹①、白衣を着る。

妹①　いや、もしかすると最初からこうするべきやったんかも。
兄①②③　何してんねん。
妹①　兄ちゃんは忘れてるみたいやけど、うちの家は代々医者の家系で、私の仕事は
これやから。
兄①②③　これ？
妹①　これを着て、ここに来る人の話を聞くこと。
兄①②③　…。
妹①　さて、それじゃ始めましょか。
兄①②③　はじめるって？
妹①　話して。
兄①②③　何を？
妹①　本当のことを。
兄①②③　本当のこと？
妹①　兄ちゃんには私に話すべき、本当のことがあるはずやろ？
兄①②③　…わかった。話すよ。本当のこと。
兄①　いいよな。
兄②　うん。
兄③　ここまできたら。
妹①　話して。
兄①　実は、
兄②　俺ら、
兄③　もともと、
兄①②③　三人やってん。
妹①　もともと？
兄①　三つ子ってやつ。
兄②　まあお前は生まれてなかったから、
兄③　知らんのも当たり前やけど。
兄①　それぞれ、
兄②　いろいろな

兄③　事情で、
兄①②③　バラバラになってしまってん。
兄②　一番最初にはぐれたのは俺。その頃俺らは淡路島に住んでてさ、畑と山しかないド田舎なんやけど。あれは確か秋口やったかなあ、台風が来るっていうんで保育園が半ドンになって、その帰り道に、竜巻が起きてさ。そらもう天まで届くような大きな竜巻やって。俺は吸い上げられてしまって。それで、真っ逆さまに落ちたのが尼崎のドブでさ、ヘドロがクッションになったんかなあ、奇跡的に命は助かったんやけど、グルグル回りすぎて記憶がなくなってしまってさ。ドブのほとりに住んでた頭ボサボサの私立探偵に拾われて、育ててもらったんやけど、その私立探偵がまた頭おかしい奴でさ、俺がドブに頭から突き刺さってたからって、俺に、スケキョって名前つけよってさ。ひどくない？　名前のせいで小中高とずいぶん苛められたなあ。
兄③　次にはぐれたのは俺。こいつが行方不明になって、うちの親もめっちゃへこんでてさ、神にでもすがりたい気持ちやったんやろうな、ベタな話やけど宗教に走って。アットホーム真理教っていう、聞いたことないかな、いわゆるカルト的な新興宗教やったんやけど。親父もオカンも東大農学部卒のメロン農家やったからさ、教祖にえらい気に入られて、メロンが大好物やったから。おかげで比較的待遇もよかったんやけど。ありがちなパターンで警察の強制捜査が入って、裏でいろいろやってたから。教団に批判的な人物を拉致して殺したり。教祖が捕まって、教団は解散。そのゴタゴタで俺は親元から引き離されてさ、施設に入れられて。施設ではずいぶん苛められたよ。人殺しのメロン野郎って。
兄①　で、最後に残ったのが俺。教団が潰れた後、各地を転々として、たどり着いたのが第三新東京市ってところやったんやけど。ほら、セカンドインパクトの後に第二次遷都計画のために作られたあそこな。まあそこでもいろいろ、よくわからん形した天使が攻めてきて、それを汎用人型決戦兵器が迎え撃ったり、いろいろあったんやけど、何とか生き延びて今に至ると。その後大阪に引っ越して生まれたのがお前や。まあ、だいたいこんなとこかな。
兄②③　うん。
兄②　俺らはつい最近まで自分が何者か知らずに生きてきたんやけど、ある日夢の中に鹿が出てきてな。
妹①　鹿？
兄③　うん、鹿の鹿子っていう女の子の鹿。鹿神様。
兄①　その鹿神様が離れ離れになった二人のこと教えてくれて。
兄②　それからここにたどり着くまでは、これまたいろいろあって珍道中やったんやけど、話し出すとあと小一時間くらいかかるから今は割愛するわ。
兄③　で、やっとこうやって再び三人揃ったってわけ。
兄①　長い間、黙っててわるかったな。
妹①　…。
兄②　ま、こんな話、信じてもらえると思ってないけど。
兄③　俺らかて信じられへんもんな。
兄②　うん。
兄①　でも、
兄①②③　本当のことやねん。

妹①　…わかってる。
兄①②③　え？
妹①　信じるよ。本当のことなんやろ？
兄①②③　うん。
妹①　ありがとう。話してくれて。苦しかったな。
兄①②③　苦しかった。
妹①　でももう大丈夫やから。一人で苦しまんでいいから。
兄①②③　うん、何か、すっきりした。
妹①　じゃあ、もう今日はこれくらいにしよっか。
兄①②③　うん。
妹①　帰ろう。

妹①と兄①②③、立ち上がる。

モノローグ④

妹①　それは置き換えたり、すり替えたりするパターンだった。最初に自然災害があって、次に新興宗教によって引き起こされた神への不信、
妹①と奈津美　最後は社会現象になったアニメーション。中景を欠いた遠景と近景。心理の空間化。全部、あの年に起こった出来事。しかし、肝心な部分は巧妙に回避されている。直接関係してるのは鹿ぐらいか。ケースがケースだけに巻き込まれる可能性も高い。
奈津美　それでも私はあの人と、共にありたいと思う。

8＃1

奈津美と斎藤

夜。虫の鳴き声。大塚家の居間。

奈津美　ん？

奈津美、畳の上に何かを発見する。

奈津美　もう、また。

奈津美、箒と塵取りを取ってきて掃除をする。
そこへ斎藤がやってくる。手には脚本の入った封筒。

斎藤　帰るわ。
奈津美　うん、ありがとうな、パソコン見つけてくれて。
斎藤　おう、見つかってよかったよ。

奈津美　でもさ、何で渡辺さんの自転車の前カゴに入ってたんやろ。
斎藤　俺が聞きたい。
奈津美　やんな。

奈津美、掃除する。

斎藤　データは残念やったな。
奈津美　まあしゃーないよ。パソコン返ってきただけでも感謝せんと。
斎藤　何でバックアップとってなかったん？
奈津美　こんなことになると思ってなかったし。
斎藤　とっておけよ。
奈津美　これからはそうする。
斎藤　あーあ、真相は闇の中か。
奈津美　なにが？
斎藤　この脚本の原本も消えたんやろ？
奈津美　だから、その脚本書いたの私じゃないから。
斎藤　はいはい。
奈津美　まだ疑ってるん？
斎藤　疑ってないよ、信じてるよ。
奈津美　…やったらいいんやけど。
斎藤　つーか、さっきから何やってるん？
奈津美　掃除。兄ちゃんがな。足の皮ポロポロ落とすから。
斎藤　足の皮？
奈津美　しかも、水虫の。あんたもスリッパ履いたほうがいいよ、うつるで。ああもう、ここにも落ちてる。そのうち何か生えてきそう。
斎藤　何かって？
奈津美　得体の知れん茸とか。
斎藤　…ああ、そういうことか。それで増える兄貴か。
奈津美　え？
斎藤　足の皮が剥がれて増殖して、登場人物や世界も増殖していく。
奈津美　だから、それは私の書いた脚本じゃないって。
斎藤　じゃあさ、誰が書いた脚本を俺らは上演したん？
奈津美　しらんよ。
斎藤　この封筒、この字はお前の字やろ。
奈津美　確かにその封筒で送ったよ。でもその脚本は書いてない。だいたい、私は自分を作中に登場させるような浅はかことはせーへんよ。そんな小手先の技、くその役にも立たへん。そんなん不毛やし。虚しくなるだけやん。
斎藤　この不毛さが今のお前のリアルなんちゃうかなって、俺は思ったんやけど。
奈津美　こんなのはリアルでもなんでもないから。
斎藤　わかった。これはお前が書いた脚本じゃない。
奈津美　…。
斎藤　じゃあ逆に聞くけど、本当は何を書いたん？　本当は何があったん？　おかしいやん。脚本がすり替えられるとか、ありえへんから。俺にはわからんからさ、

言うてくれんと、本当のことを。
奈津美　本当のこと？
斎藤　うん。
奈津美　…それは例えば、あの時に私も一緒におったとか？
斎藤　あの時？
奈津美　私も、兄ちゃんと今日子さんと一緒に事故に遭って、私だけが生き残ったとか？
斎藤　…。
奈津美　私だけが生き残って、幻の兄ちゃんと暮らしてるとか。
斎藤　…。
奈津美　それとも私も死んでて、今あんたとしゃべってる私も幻とか。
斎藤　…。
奈津美　それやったらどんなによかったか。その方がよかった。でもな違うねん。私のリアルでは、やっぱり事故に遭ったのは兄ちゃんと今日子さんで、やっぱり私は蚊帳の外やねん。
斎藤　…それが本当のこと？
奈津美　どれが本当のことやと思う？
斎藤　…わからんな。
奈津美　わからんやろ？
斎藤　わからん。
奈津美　やとしたらさ、それを私が書いてたっていいかなって思う。
斎藤　はあ？
奈津美　書いた覚えは全くないんやけど。まあ書いたような気もするしな。
斎藤　何それ。じゃあ俺かて書いたような気がするよ。
奈津美　はあ？
斎藤　お前の書いたの気にいらなくて俺が書き直した。
奈津美　何が気に入らんかったん？
斎藤　痛々しすぎた。俺にはお前に書いてほしいことと書いてほしくないことがある。自分勝手かもしれんけど。
奈津美　それであんたがすり替えたん？
斎藤　そう。(手を挙げて)はい、これ全部、俺が書きました。
奈津美　(手を挙げて)私やって。
斎藤　…何かこれ、あれみたいやな。
奈津美　…ほんまやな。
二人　どうぞどうぞ。
斎藤　…だから俺が書いたんやって。
奈津美　私やって。
二人　どうぞどうぞどうぞ。
斎藤　…何なんこれ。
奈津美　私がききたい。

9＃1

増える兄貴③

オオツカ家の居間。
兄①②と妹①②が朝ごはんを食べている。

兄①②　ごちそうさまでした。
妹①②　はい。

兄①②、立ち上がる。

妹①②　ちょっと、兄ちゃんどこ行くん？
兄①②　いや、部屋。
妹①②　ご飯食べ終わったら話しあるって言うたやろ。
兄①②　えー、またー？
妹①②　いいから、座りなさい。
兄①②　はーい。

兄①②、座ろうとするが、

兄①②　ん？　んん？　ちょっと待って。
妹①②　どうしたん？
兄①②　目の錯覚かな。何かおかしくない？
妹①②　え？
兄①②　こっち一人減って、そっち一人増えてない？
妹①②　…ほんまや。私増えてる。
兄①②　何で？
妹①②　…。
兄①②　どういうこと？
妹①②　どういうことやろ。
兄①②　しかも、何か一人ごっつくない？
妹①②　え？
兄①②　明らかに一人大きさ違うけど。
妹②　そんなことないよ。なあ。
妹①　うん。
妹②　うりふたつやで。
兄①②　そ、そうかあな。で、どうする？
妹①②　どうするって？
兄①②　また行く？　病院。
妹①②　うーん、いいんちゃう今日は。
兄①②　いいの？

妹①②　いいやん別に。
兄①②　よくないやろ。
妹①②　じゃあ、逆に聞くけど、何か支障ある？
兄①②　え？
妹①②　かわいい妹が二人に増えて。
兄①②　…かわいいかどうかは置いといて、支障あると思うけどな。
妹①②　どんな？
兄①②　ぱっとは出てこうへんけど。
妹①②　ちょうどいいやん。そっちも二人なんやし。
兄①②　そういう問題か？
妹①②　兄ちゃんもちょっとは困ったらええねん。兄ちゃんが増えて私がどんだけ困ったことか。
兄①②　どういう理屈？
妹①②　これでやっと対等になったってこと。
兄①②　対等ねえ。
妹①②　うん。
兄①　まあいいか。
兄②　ん。
妹①②　じゃあ、そういうことで。

妹①②、鼻歌を歌いながら食卓を片付ける。

兄①　ほんまにこれでいいんかなあ。
兄②　ええんかなあ。
妹①②　あ、そうそう兄ちゃん大事な話忘れてた。
兄①②　なに？
兄①　そや、いつもお前大事な話を言いかけてやめるから。
兄②　俺も気になってて。何やねん。
妹①②　今度の日曜日、何の日か覚えてる？
兄①②　え？　何やったっけ？
妹①②　ええっ、信じられへん。
兄①　うそうそ、わかってる。
兄②　覚えてるよ。
兄①②　…あいつの命日やろ。
妹①②　お墓参り。一緒に行こな。
兄①②　…ん。

１０＃１

エピローグ

夜。大塚家の居間。
今日子、足の裏の水虫を掻いている。
そこへスーツを着た翔平、帰って来る。

翔平　…ただいま。
今日子　おかえり。
翔平　…ただいま。
今日子　おかえり。
翔平　…ただいま。
今日子　何回言うんよ。
翔平　…いや。
今日子　どうしたん？
翔平　ありがとうな。
今日子　は？
翔平　おかえりって言うてくれて。
今日子　何なん急に。
翔平　いや別に、ふとそう思っただけ。
今日子　変なの。
翔平　疲れてるんかな。
今日子　そうそう、見て見て、いい物件見つかったよ。

今日子、チラシを見せる。

今日子　ほら、これなんやけど。ここからやったら市内まで車で一時間くらいやから、ギリギリ通勤圏内やん。他の条件もぴったりやねん。
翔平　へー。
今日子　今度の休みの日に見に行こうよ。
翔平　…うん。
今日子　どうしたん？　あんまり乗り気じゃないやん。
翔平　いや、そんなことないよ。
今日子　翔平も言うてたやん、子供育てるなら自然の多いところがいいって。
翔平　まあ、その前に結婚せなあかんけど。
今日子　いいやん、善は急げっていうし。
翔平　でもこれはちょっと極端すぎひんか？
今日子　いや、極端なくらいがちょうどいいねん。
翔平　うーん、つーことは、やっぱ車の免許いるよなあ。
今日子　いい機会でしょ。だいたい何で今まで取りに行ってないのかわからへん。
翔平　この年になって、学校とか通いたくないよ。
今日子　いいやん、とりあえず、見に行くだけ行ってみようよ。

翔平　うん、わかった。
今日子　レンタカー借りて。私、運転するし。今度の日曜日な。
翔平　…ちょっと待ってくれ。

そこへ鹿五郎がやって来る。

鹿五郎　ピーヤ。
翔平　え？　何？
鹿五郎　ピーヤ。
今日子　そっか、もうそんな時間か。
鹿五郎　ピーヤ。

鹿五郎、立ち去る。

翔平　何なん？　何今の？
今日子　鹿の鹿五郎。
翔平　鹿五郎？

今日子、立ち上がる。

翔平　どうしたん？
今日子　いや、そろそろ帰らんと。
翔平　帰るってどこに？
今日子　山。
翔平　山？
今日子　これは夢やねん。
翔平　夢？
今日子　鹿の鹿子の見てる夢。
翔平　鹿子？
今日子　うん。これから私たちにひき殺される可哀そうな鹿の鹿子の見てる夢。ほんとは鹿族の先頭に立って人間と戦うはずやったんやけど。またやり直しやって。
翔平　やり直し？
今日子　次また生まれ変わるまで、また千年くらいかかるかな。
翔平　…そっか。じゃあもう会われへんの？
今日子　長生きしてよ。そしたら会えるかもよ。
翔平　わかった。頑張ってみるわ。
今日子　頑張って。
翔平　元気でな。
今日子　うん。
翔平　鹿五郎さんにもよろしく。
今日子　うん、それじゃあね。バイバイ。

今日子、立ち去る。

１０＃２

翔平、一人残される。じっと足の裏を見る。

翔平　…ただいま。

誰も返事をしない。

翔平　…ただいま。
奈津美　おかえり。

翔平、驚いて振り返る。
奈津美が立っている。

翔平　何や、お前か。
奈津美　何やとは何よ。
翔平　いや、別に。
奈津美　で、どやったん？
翔平　え？
奈津美　久っしぶりに、会社行ったんやろ？　まだ机あった？
翔平　あったよ。
奈津美　よかったやん。
翔平　何かみんな気つかってくれててさ、くすぐったかったわ。
奈津美　兄ちゃん、ちょっとこっちおいで。
翔平　…なに。
奈津美　いいから。

翔平、奈津美に近づく。

翔平　何やねん。

奈津美、翔平の足にスプレーを噴きつける。

翔平　何すんねん。
奈津美　ブテナロックＶアルファ爽快パウダー。
翔平　あ、お前。
奈津美　いつまでもさ、
翔平　なに？
奈津美　…。
翔平　…わかってるよ。
奈津美　じゃあ、治してよ、水虫。
翔平　わかってる。

翔平、手を差し出す。
奈津美、水虫の薬を手渡す。
翔平、自分で水虫の薬を足に噴きつける。

奈津美　もっと。
翔平　わかってるって。

翔平、これでもかというくらい噴きつける。

奈津美　よしよし。
翔平　…ほんまにいいんかな、これで。
奈津美　え？
翔平　たぶん俺はさ、立ち直るよ。そのうち、たぶん。わかるねん。俺はそういうやつやから。でもそれが申し訳なくてさ。
奈津美　…ちょっと兄ちゃん。
翔平　なに？
奈津美　話の途中で悪いけど。
翔平　どうしたん？
奈津美　パス。
翔平　何で。
奈津美　何かさ、足が、猛烈に痒くなってきた。
翔平　え？
奈津美　これはもしかして。
翔平　それはあれか、聞いてて痒くなる話を俺がしたって意味か？
奈津美　違うよ。リアルに痒いの。考えるのも恐ろしいけど、うつったかも。
翔平　…ほらよ。

翔平、水虫の薬をかまえる。
奈津美、足を差し出す。
翔平、水虫の薬を噴きつける。

暗転。

おしまい